



日本は堂々としていたら良い ～鄧小平が目指した日中関係～



エズラ・ヴォーゲル氏
ハーバード大学名誉教授

日本と東アジア諸国との関係が緊密になる中で、中国との付き合い方をどうすれば良いのか、中国に対し、いかに交流し、文化的関係を築いていけば良いのか。

『ジャパン・アズ・ナンバーワン』の著者であり、

中国研究者として知られるエズラ・ヴォーゲル氏(社会学者)が、

1980年代に経済的、文化的成功をおさめた鄧小平路線を振り返りながら、これからの中国との関係のあり方について語った。

鄧小平は日本を熟知

私は近年、中国で鄧小平の研究を行っています。そこで今日は、鄧小平の目指した日中関係からお話したいと思います。

鄧小平は1904年に生まれ、16歳でフランス政府の勤工儉学運動に応募して、渡仏しました。しかし実際には、第一次大戦直後の不況で勉強はできず、重労働ばかりさせられました。1920年、ソ連革命の3年後のことです。

彼は「中国の金持ちよりもフランスの資本主義者はいい生活をしているが、労働者は圧迫されている。しかしもっと圧迫されているのは外国人労働者だ」と感じました。そしてロシア革命の原因は自分にも当てはまると思い、共産党に入党しました。周恩来や陳毅もフランス留学を経て、入党しています。ですから彼らは外国事情に通じていたはずですが、毛沢東は外国について、たぶんわかってはいなかったでしょう。

鄧小平は入党後26年から1年間ソ連へ行きました。彼が78年に行った改革開放政策は、その頃のソ連がとっていた経済政策の影響ではないかと思えます。当時のソ連は資本家、自営農、外国企業、外貨などを認め、自由経済を拡大させていました。彼はそのソ連での体験をもとにして、共産党を指導しようと思ったのです。鄧小平は27年からゲリラ活動に身を投じ、37年から12年間は日中戦争と国共内戦に参加しました。49年の中華人民共和国成立後、約1億人が居住する西南部6省の指導者となり、解放と復興を推進しました。そして52年から、失脚していた時期を除いて、中央の役職を歴任しています。78年、彼が中国の最高指導者になった時、軍隊、地方、海外と豊富な体験を積んでいたのです。

文化大革命で追放されていた鄧小平が73年に北京に帰ってきた時、周恩来は肺がんにかかっていたので、国の要人との面会はほとんど鄧小平が

行いました。また72年に田中角栄によって日中国交正常化が行われ、73年から75年にかけての外国人客は日本人が最多を占めました。

鄧小平の顧問には廖承志がおりました。彼は国民党幹部の息子で、日本生まれの日本育ち。鄧小平は日本人と面会する前に廖承志から情報を得て、相手について把握していました。

鄧小平は2～3年間に、日本の各政党代表者、地方指導者、メディア代表者、仏教関係者など40以上もの代表団と会っています。ですから78年10月、日中平和友好条約批准書交換のために来日した時、日本の状況をよく理解していました。

国交正常から条約締結へ

1972年、ニクソンが訪中し、米中関係の修復を図りました。反共主義者で名高いニクソンにとってそれは簡単なことではなかったがゆえに、アメリカ国内ではあまり批判されませんでした。これが民主党（アメリカ）であれば弱虫と罵られたでしょう。

鄧小平の場合も「抗日兵だった彼が日中友好を主張するなら」と、反対されることはありませんでした。しかしながら78年まで日中関係はほとんど進展をみませんでした。72年に出した共同声明の中の覇権条項を日中平和友好条約に入れるか否かでもめたからです。中国側は共同声明に基づき反覇権主義を明確にうたうべきだと主張しましたが、この覇権主義はソ連を指す言葉であるため、ソ連の反発を恐れる日本は使用しなかったのです。

交渉を重ねるうち、日本の外務省が知恵を絞って「もし、反覇権主義という言葉を使うなら、“（日本と中国以外の）第三国に対しては反対しない”という意味のフレーズを入れてはどうか」と提案しました。実務的な人間だった鄧小平もそれを承諾し、ようやく両国の条約締結が実現したのです。

条約締結の背景

鄧小平が日米と仲良くしようとした理由の一つは、中国とソ連が国境をめぐる敵対していたことでした。当時ソ連とベトナムは接近し、中国には東南アジア側から攻撃される危険があったからです。実際にベトナムはカンボジアを攻撃する準備をしていました。ソ連がベトナムの港を使えばインド洋から太平洋まで出入り可能になります。またベトナムの空軍基地から中国を攻撃できます。ニクソンは1969年にグアム島で「我々はアジアで戦うつもりはない」旨を公表していたので、中国はアメリカの脅威はないと判断し、ソ連と敵対していたアメリカと手を結び、ソ連を抑止しようとしたのです。国内では文化大革命が終結しておらず、中国軍も脆弱であったので戦う力はありません。日米と良好な関係は防衛上必要でした。

もう一つの理由は近代化の推進です。彼は76年に失脚し77年に3回目の復帰を遂げた時、工業の近代化を重視し、技術力のある日米の支援を受けたいと考えました。

日本の目覚ましい経済成長は中国に刺激を与えました。韓国、台湾でも経済成長がはじまっており、中国はこれに続くことを望んだのです。



小さい島より大局を

鄧小平は改革開放政策を打ち出す直前の78年10月に訪日しました。背後にあった目的はソ連およびベトナムからの防衛と近代化の援助要請でしたが、彼は来日の理由を表向きには「日中関係を支持した人に感謝を伝えるため」「日中平和友好条約批准書交換」「徐福のように永遠の秘密を知るため」と述べました。徐福は不老不死の仙薬を求めて日本へ来た伝説上の人物ですが、鄧小平は仙薬ではなく産業の秘密を得たいとユーモアを持って話し、非常に歓迎されました。

長い日中交流史の中で、鄧小平は中国指導者として初めて来日し、天皇と会見しました。昭和天皇は戦争のことを遺憾だと表明し、鄧小平はその発言に驚いたとのことでした。

日程には工場視察があり、鄧小平は君津の新日鉄を当時会長であった稲山嘉寛氏の案内で訪ねています。稲山氏は日中経済界のパイプ役で、武漢製鉄に技術協力した実績もあり、中国を助けたいという思いを持っていました。鄧小平は滞仏時代に体験した鉄鋼工場での苛酷な労働状態とは比較にならない技術や設備に感動し、宝山製鉄所もぜひ同じような工場にしたいと要望しました。

新幹線に乗ったり、座間市の日産自動車でロボット技術を見たりしたことも、鄧小平にとって近代化への理解につながりました。

関西では松下幸之助氏に会っています。鄧小平が中国における最先端技術を用いたテレビ製造を要請すると、松下氏は「最先端技術は簡単に海外へ伝えられないがそれに次ぐ高い技術を提供する」と約束しました。松下氏にとってこれはビジネスだけではなく、中国の貧しい家庭にテレビを普及させたいという夢を込めた事業でした。

また鄧小平は田中角栄の私邸に訪ねています。訪日前これに難色を示した人もいましたが、面会は実現しました。鄧小平は訪米に際してニ

クソンにも会いたいともっていますが、ウォーターゲート事件があったので実現していません。

その他、宇都宮徳馬氏（参議院議員、日中友好協会会長）、日中総合貿易（LT貿易）に尽力した故・高碓達之助氏の家族に会い、お礼を述べています。側近によれば鄧小平は親しみにくい人物だったそうですが、中国の恩人に対してはこうした行き届いた思いやりを示したのです。

彼は来日時、東京で記者会見をしています。中国は民主主義国家ではなく彼には記者会見の経験がなかったにもかかわらず、記者会見は非常にうまくいきました。その原因は正直さにあります。たとえば新聞記者が毛沢東は悪いことをしたのではないかと質問すると、鄧小平は「毛沢東も間違ったが、我々も間違った。我々にも責任がある」と答えています。尖閣列島については「この問題は将来、我々よりも頭のよい人間にまかせよう。小さい島より、我々は大局を重んじる」と前向きな発言をしました。

日本人は戦前から対中ビジネスに熱心でしたが、戦後はアメリカに遠慮して思うにまかせませんでした。それが国交回復でチャンスが到来した。中国は台湾と関係がある企業とは取引しないという条件を出していたので、子会社を作った企業もありました。当時、中国には詳細を調査できませんでした。そういう方法もとりながら、ビジネスが始まりました。

80年代、日本は懸命に援助

鄧小平は日中友好において文化交流も重視しました。80年代に日本の映画、ドラマ、音楽等が中国で紹介され、『おしん』は大変な人気でした。山形の古い時代の母親像は極めて日本的であると思われるのですが、子のために努力する母の姿としては普遍性があり、中国人に深い共感をもたらせたのです。この頃、若い中国人学生は日本文化が好きになり、今もその世代は「日本によい小説が

あったな」というような親しみの気持ちを持っています。鄧小平は実に将来を見据えて、文化施策を行ったといえます。

文化交流成功の一方で、プラント事業などは中国政府内に混乱があったため、契約中止や延期が多発し、当初日本の財界は非常に失望しました。しかしその後改善されて経済交流も非常に活発になっていきました。当時、日本のODAは非常に強力でした。JICA（国際協力機構）も他国より多くの援助金を出していました。戦後賠償を求めないと決めたのは国民党ですが、日本はその代わりに援助を行いました。日本企業は技術、品質管理、経営などあらゆる面で援助しました。上海のJETRO（日本貿易振興機構）の斡旋で日本の中小企業もそれに協力しました。

日本は第二次大戦の贖罪として一生懸命に援助し、鄧小平もそれをわかっていました。しかし今、中国は日本の援助について黙っています。日本人は第二次大戦時の過ちを話すべきであり、中国人は80年代に受けた援助を話すべきです。

愛国主義教育の功罪

日中関係において最初に起こった問題は、プラント契約の中止や延期、次は86年の胡耀邦の失脚です。胡耀邦は日中交流に高い理想を持ったまじめな人物でしたが、準備不足なのに3,000人の日本青年を招待するなどして批判を受けました。日本と最もいい関係を持っていた指導者の失脚は、両国間に非常に悪影響を及ぼしました。

最近の問題は愛国主義教育です。愛国主義教育は89年の天安門事件後、共産党から若者の支持が離れることを恐れて行われました。それまで中国は政治教育を重んじた社会主義教育を行っていましたが、ソ連や東欧諸国の瓦解によって、中国は社会主義教育の限界を痛感。それに代わるものとして愛国主義教育をはじめたのです。

私が知る限り、最初、愛国主義教育は反日的ではありませんでした。しかし宣伝部は人心を動かすために手っ取り早く反日を利用しました。たとえば日本で一部の右翼が南京事件はなかったと発言しても日本の新聞は相手にしませんが、中国では大見出しで新聞に載せる。すると中国の読者はそれが日本人を代表する意見だと思って騒ぐ。宣伝部はこういうことをどんどん行いました。

戦争体験をした人も少なくなっている現在、反日は戦時の嫌悪に基づくのではなく愛国主義によって植え付けられたものになっています。

中国が極端に走る理由

私は最近、中国人が極端なことをする理由は三つあると思います。

一つめはアメリカの金融危機、とくにリーマンショックです。「アメリカは経済的に失敗したが中国は成功した」「我々は高度成長を続けている」「アメリカや日本を追い越した」という驕慢な気持ちが、極端な行動に表れているのではないでしょ

うか。あえて失礼な言い方をしますが、バブル期の日本人にもそんなところがあったと思います。

二つめは国内政治の混乱です。鄧小平は強い権力を持っていましたが、胡錦濤はそうではありません。だからいろんな人がめいめい勝手な考えで行動する。その中には変な人もいるのです。

三つめは国際関係の拡大。企業の場合、かつては国際課が窓口でしたが、今はどの部署でも海外とやりとりしています。軍隊でも同じようなことになっています。

日本は堂々としていたら良い

では中国とどう付き合ったらよいのかというと、中国が難しい顔をしていても、日本は堂々としていたらよいのです。関西は上海との特別な関係があるので、そのパイプも駆使すべきです。上海の役人の中には中国政府が変なことをやっていると感じ、日本と良好な関係を保ちたいと思っている人もいます。関西の大学が持つ中国人のパイプ、経済界の

パイプ、いい関係を作るチャンスがあれば、それらを十分に使うべきだと思います。

文化戦略としては、中国でも人気の高いアニメの訴求がまず考えられます。仏教も中国で流行していますから、奈良や京都などの古都の魅力も訴求できます。音楽、クラシックなど、紹介できるものはいろいろあります。それから関西経済同友会とハーバード大学が協力したような交流会や勉強会を行うのもよいと思います。

現在、中国は高度成長していますが、日本がそうであったように、今後、経済成長率が下がるのは必然です。中国はかつて日本から工業を学んだように、高度成長が失速した時にどうすべきかを日本の経験から学ぶべきだと思います。私は日中両国に好意を持っていますし、良い関係が続いてほしいと願っています。日本は難問に遭遇しても、堂々としてできるだけ交流を進める以外はないと思います。

エズラ・ヴォーゲル Ezra Feivel Vogel

ハーバード大学名誉教授

1930年生まれ。1950年オハイオ・ウェスリアン大学卒業。

アメリカ陸軍に2年間勤務の後、1958年ハーバード大学社会関係学科で博士号を取得。1960年イエール大学精神医学部助教授を経て、1961年ハーバード大学の博士研究員として中国の歴史の研究に従事。1964年からハーバード大学講師、1967年にハーバード大学教授（社会学）。同大学内で、東アジア研究所長、東アジア研究評議会議長、日米関係プログラム所長、フェアバンク東アジア研究センター所長などを歴任。1993～95年、CIA国家情報会議（CIAの分析部門）東アジア担当国家情報官。2000年にハーバード大学を退官、以降、鄧小平による中国の改革の研究を本格化させている。著書に『日本の新中間階級—サラリーマンとその家族』、『中国の実験—改革下の広東』、『ジャパン・アズ・ナンバーワン—アメリカへの教訓』、『ジャパン・アズ・ナンバーワン再考—日本の成功とアメリカのカムバック』など多数。

関西・大阪文化力会議2011